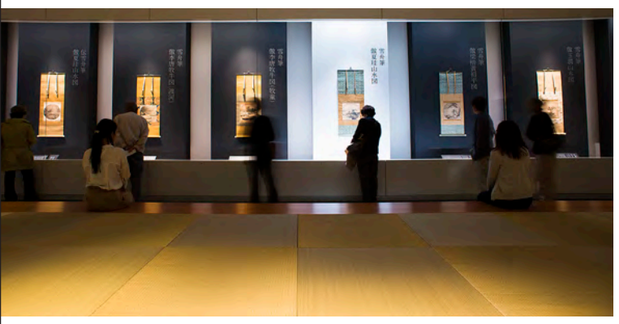
アート解放区

特集－山口県立美術館

1979 年に開設された山口県立美術館は、山口市の市街地の中心に立地する。ここでは、山口県民の感性を刺激しアート力を高める、独創的かつ挑戦的な取り組みが行われていた。

アートの魅力を解き放つ

2017年12月まで開催されていた「雪舟発見！展」では、高精細映像展示《4Kで見る国宝・山水図》も公開された



日本画の展示室には畳に座って鑑賞できるスペースが設けられている。
都会的で洗練された空間で観る作品は古さを感じさせず、雪舟の水墨画が室町時代に最先端のアートであったことが理解できる展示が実現している

郷土山口のアートをみせる

山口県立美術館は、収集・研究活動の対象のほとんどを、郷土ゆかりの作家による作品としている。なかでも室町時代に活躍した雪舟の水墨画と山口県出身の画家 香月泰男（かづきやすお）のシベリア・シリーズはコレクションの看板となっている。

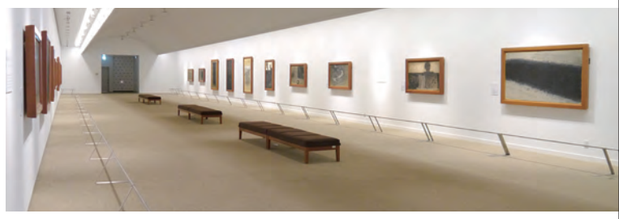
「山口を代表する二人の画人の作品には、見た目の派手さはありませんが、人を惹きつける魅力があり、県外から訪れる根強いファンの方もいらっしゃいます。郷土ゆかりのアートの魅力を、わかる人にはわかる、という状況に留めず広く県民に伝えていくことは、当館の使命のひとつだと考えています」と山口県立美術館 斎藤 郁夫副館長は語る。

現代人の感性に触れる展示

山口県立美術館の“作品の魅力を多くの人に伝えたい”という想いは、見せ方へのこだわりに表れている。作品一点一点に対し、その魅力を最大限に引き立て、見る人の興味を引くよう考え抜かれた展示からは、美術館スタッフの作品への敬意とアートへの情熱が感じられる。

「研究し尽くされた古美術であっても、一般の人々が分かるか、面白いと感じられるかという観点で解釈しなおし、時代の感性に触れる展示を意識しています。解説文は専門用語にとらわれることなく、馴染みのある言葉を積極的に取り入れています」解説に現代的な表現を取り入れる一方で、日本画の展示室内の照明では作品がつくられた時代の室内の明るさを再現してみせるなど、作品の製作背景を汲んだ鑑賞環境を提供している。

「当館の展示室は比較的コンパクトで、大規模な美術館と比べると展示点数が絞られますが、その分、見せ方や解説に工夫を凝らして、作品の良さをしっかりと吸収できる充実した展示をめざしています」



香月泰男の没後40年を記念して2014年に開催された「香月泰男展」。香月泰男のシベリア・シリーズは、1943年から4年間の戦争体験をテーマに描かれたシリーズ作品で、全57点を山口県立美術館が所蔵している

県民に開かれた美術館

県民が美術館の企画や運営にかかわる

山口県立美術館では、基本方針に「県民が参加する開かれた美術館」を掲げている。

「子どもや家族で楽しめる展覧会の誘致や、ものづくりの歓びを体感できるワークショップの開催などのアートの間口を広げる企画を行っています。また、美術館の運営や企画に携わる、アーティストを支援するなど、アートや美術館とより深く付き合う機会を提供しています」と斎藤副館長は話す。

美術館ボランティアは、県民参加の一つのカタチであり、県民の視点を美術館運営に活かしていく取り組みでもある。山口県立美術館のボランティアは、美術館を「手伝う」のではなく自発的に活動する自立した組織である、という点がユニークで、“来館者と作品との距離を縮める橋渡しを”をテーマに、ボランティアが主体となってワークショップの企画・運営や館内広報誌の発行を行っている。

幕末に萩明倫館に代わって藩校となった山口明倫館の跡地は、現在山口県立美術館、山口県立博物館、山口県立図書館による文化・教育の拠点となっている。
周辺は、パークロードと呼ばれる県道 203 号線を中心に一帯が大きな公園とともに整備され、文教地区にふさわしく歴史と自然を感じられる環境がつくられている

鹿島建物管理概要

管理開始　2011 年 4 月
管理内容　設備管理業務、清掃業務、警備業務
管　　轄　中国支社　山口出張所
※山口県立美術館及び山口県立萩美術館・浦上記念館は、山口県・サントリーパブリシティサービス㈱・鹿島建物総合管理㈱にて、共同事業体協定書に関する覚書を締結しています

建築概要

施設名称　山口県立美術館
所 在 地　山口県山口市亀山町 3 番 1 号
主要用途　美術館
設　　計　鬼頭梓建築設計事務所
施　　工　鹿島建設株式会社
面　　積　建築面積　4,307.65㎡
　　延床面積　6,699.41㎡
構　　造　RC 造 (一部 S 造)

主要設備概要

電気設備　6.6kV　1 回線受電方式　トランス総容量　1,100kVA
　　非常用発電機　125kVA × 1 台
空調設備　熱　源：氷蓄熱ユニット、空冷ヒートポンプチラー、
　　ガス焚吸収式冷温水発生機、ガス焚真空式温水器、
　　ガス焚簡易貫流ボイラー、温水ボイラー
　　空調機：AHU × 12 台　他
衛生設備　高架水槽　8㎥ (2 層式) ×1台

これからの山口アートを育てる

毎年、秋には公募展「山口県美術展覧会」が開催される。作品のジャンルや大きさに制限を設けず、真にすべての作家に開かれた作品発表の場としており、県内の作家を中心に、例年400点前後の応募がある。公開審査で選ばれた約100点が展示され、会期中は出展者の家族や山口市民など4,000人近くが訪れている。

「会場には『私のイチオシ』というコーナーを設け、ご来館いただいた方に、気に入った作品について付箋にコメントをもらい、掲示しています。コメントは最終的に作家本人に届けられ、創作意欲の向上につながっています。観覧者にとっては“イチオシ”をみつけようとすることで作品に対する観察力がぐんと高まります。この取り組みは、美術館ボランティアのアイディアからはじまりました」

さらに、この公募展と同時に開催されるアートイベント「HEART」では、作家が作品に値段をつけ、一般の来館者がアート作品を購入できるようになっている。“買う”という行為によって、アートがさらに身近で特別な存在になるとともに、作家の創作活動を財政的に支援することにもなる。山口県立美術館がコーディネートする県民とアートとの多様な関係性は、アート活動の好循環を生んでいる。

「県民の皆さんから刺激を受け感性をみがきながら、当館が、山口のアート文化を醸成し発信していく拠点となることをめざしています」

美術館ボランティアの企画・運営によるワークショップの様子。「ポンペイの壁画展」では、壁画のモックアップをつくるワークショップが開催され、壁画の製作過程を楽しみながら学んだ

写真左：「山口県美術展覧会」の会場に設けられた「私のイチオシ」コーナー。生の感想やプラスの評価を得られることが出品した作家からも好評だという
写真右：「HEART」は日常生活のなかでアートを体験してもらう、というコンセプトのもと、山口県立美術館が中心となり、山口市や山口商工会議所などと連携して行われている

The BM PARTNER

TALK TO TALK 対談

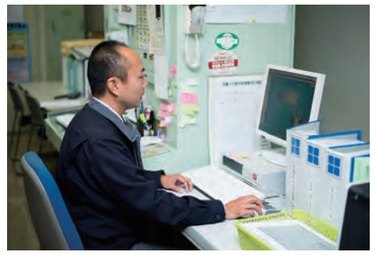
自由で開放的な活動を支える施設管理

展示空間を鑑賞空間へと仕上げる

斎藤様　当館では、学芸部門を山口県直営で行い、施設運営全般は指定管理者のサントリーパブリシティサービス株式会社（以下、SPS）さんに委託し、鹿島建物さんには設備管理業務を担っていただいています。

木村様　私たち指定管理者は、広報や利用促進、施設管理などの運営に関わる業務を行っています。特に運営や広報業務の分野については、斎藤副館長をはじめとする学芸員の皆さんの意向を汲み、反映していけるよう意見を交わしながら行っています。皆さんアートに対する愛情が深く、見せ方へのこだわりを強くもっていらっしゃいますので、どうすれば実現できるか、ともに考え具現化していくのが私たちの務めです。

若林様　照明ひとつとっても、光の当て方、当てる範囲、強さ、色温度などを作品ごとに検討しています。例えば、光が額縁の外に出ないようにスポットライトにフレームをつけて光の範囲をミリ単位で調節するなど・・鹿島建物さんには、そのこだわり抜かれた展示空間の室内環境をまもっていただいているわけです。



写真左：全館の冷暖房熱源設備は、毎日欠かさず点検を行う
写真右：管理室では、センサーが感知した展示室の温湿度をモニタリングしている

斎藤様　室内の環境が快適でなければ、観る人も展示に集中できなくなってしまいます。もともと美術館の温湿度管理は作品保護の観点から厳しい条件が課せられているものですが、山口県立美術館の場合、展示によって展示室の使い方を大きく変えるため、環境を維持するのは大変だと思います。

髙﨑　私も温湿度管理は美術館管理の要と考え業務にあたっています。展示室の空調設備は室内のセンサーで自動制御されていますが、展示室の使い方によっては、室内のポイントごとに温湿度にムラが出ることもあり得るため、新しい展示の設営が終わったら、実際に展示室内を歩き回って温湿度の観測を行います。

木村様　斎藤副館長がおっしゃるとおり、作品保護のための制約条件と接遇面の快適な空間づくりを同時に叶えようとすると、バランスをどう取るか悩むこともありますよね。

髙﨑　そうした場合は、設定値を山口県立美術館さんと SPS さんとともに検討し、開館中は厳密に値を保つように常に意識しています。

斎藤様　私たちが自由に想い描いた展示を、まず SPS さんが形にしてくださる。そして、鹿島建物さんの細やかな対応によって鑑賞に適した空間に仕上げられているということですね。

コミュニケーションで快適性を維持する

若林様　髙﨑さんは、開館時間中に何度も館内に足を運んでいますよね。監視係のスタッフから要望を直接聞いてすぐに対応してくださるので助かっています。

髙﨑　天候や来館者数によっても室内環境が大きく変わります。とはいえ、常に展示室を見張っていることもできないので、巡回の際に、環境の変化やお客様の反応を一番近くで見ている監視係のスタッフさんとコミュニケーションをとり、状況把握とご要望のヒアリングに努めています。

木村様　昨年の春に開催した「スタジオジブリ・レイアウト展」は来館者数が予想を大きく上回り 7,000 人超を記録した日もありました。ロビーが入場待ちの人で埋まり、人の出入りも多く、髙﨑さんに奔走いただいたことを記憶しています。

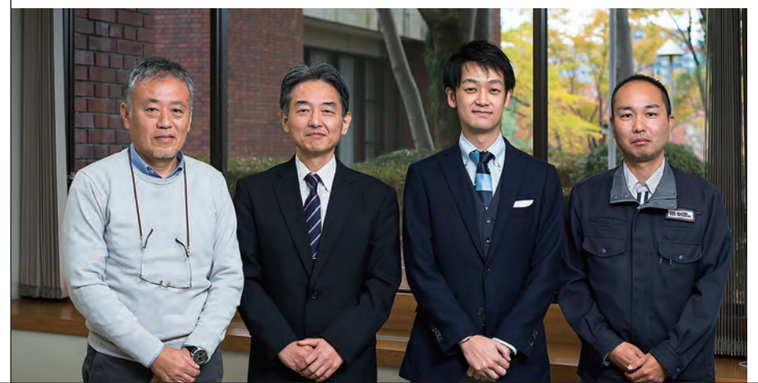
髙﨑　小さなお子さんを連れたご家族でのご来館も多く、いつもとは違った熱気に包まれていましたね。ゴールデンウィーク中は暑い日も多く、体調を崩す方が出ないように気を遣いました。

斎藤様　美術が好きと同時に美術館が好きと言っていただけたらうれしいですね。普段アートに親しむ習慣のない方も足を運ぶきっかけとなるような人気の展示会を積極的に誘致して美術館ファンを増やしていくためには、SPS さんと鹿島建物さん、それぞれのノウハウと連携が必要不可欠だと感じています。

若林様　鹿島建物さんの実直な仕事ぶりと集客施設管理の豊富な経験を、パートナーとして心強く思っています。今後はさらに連携を強め、一丸となって施設運営にあたっていきましょう。

「スタジオジブリ・レイアウト展」には世代を問わず多くの人が訪れた

髙﨑　SPS さんと協力し、展示への評価が高い山口県立美術館にふさわしい快適な鑑賞環境の維持に努めていきます。これからもよろしくお願いいたします。



写真左より
山口県立美術館　副館長
斎藤　郁夫　様

サントリーパブリシティサービス株式会社
山口県立美術館　ゼネラルマネジャー
若林　英樹　様

サントリーパブリシティサービス株式会社
山口県立美術館　支配人
木村　大輔　様

鹿島建物総合管理株式会社
中国支社　山口出張所　山口県立美術館管理事務所　所長
髙﨑　渉

「現場」に足を運ぶことの大切さ

展示空間の隅々まで快適であるように、まず自分の目と肌で室内環境を確認してから温湿度を計測するようにしています。山口県立美術館さんの展示にこだわり抜く姿勢にならって、労を惜しまない維持管理の姿勢を大切にしていきます。